

# 会員の広場



## 福島復興計画 私の提案

内田 宏之（東京）

「汚染した土を仮置きして30年後に震災地に戻す」のではあまりに日本らしきがない。福島の人たちに空白が生じないような新しい計画を提案したい。その骨子は、「放射能汚染土を集め、高さ4メートルに積み上げて覆土を施した用地を作り出し、その上に水槽や池群を設け、そこで次世代燃料を絞り出せる藻類を培養し燃料油などを生産する」というものだ。

理由をキーワードとともに列記する。

①放射性物質を「眠らせる」——これによって、人の立ち入りが早くできる。放射線は、厚く剥いだ土の中で減衰してもらう。

たとえばセシウム137から出るガンマ線は、水60センチ厚を汚染土に載せると水による遮蔽効果で10分の1になるといふ。かつホットスポットの生成で高濃度汚染土となっている可能性を考慮し、放射性物質を眠らせる期間はセシウム137の半減期の10倍の300年とする。300年で放射線強度は1024分の1に落ちる。水60センチ厚は放射線を眠らせるだけでなく、「水槽＝藻類培養」で有効活用する。

汚染面積をおよそ1000平方キロと想定。作業スピードを上げるため10センチ厚で表土を除去し、除去した汚染土の盛り土用地は水島コンビナートなどの面積を参考とする。その汚染土を積み上げ覆土には無人重機を多用し被曝を少なくする。田畑の汚染土、牧草

地の汚染土、その他の汚染土の3種に分けて盛り土をする。300年後には土を元に戻す可能性を考えて分類する。同時に里山の外周に側溝を整備し、里山からの放射能拡散を抑え、その際に生じたホットスポットの汚染土はその他の分類に入れる。

②福島から新産業と雇用を創出する——福島浜通りは日照に恵まれ雪も少なく水もある。この特徴を活かす。東北地方には藤原三代の時代には最先端の鉄の技術があり、鎌倉幕府はこれを導入するなど、新産業起業の気風がある。それを藻類の培養で生かす。

覆土上の藻類や緑虫を培養する水槽群は、パイプラインでつなぎ、大藻類産業を創出する。さらに放射能の鎮静化を確認しつつ、緑虫等から飼料を生産し水槽や池群での魚類養殖や畜産へとバイオコンビナートをつくる。地域住民の就職可能な新規産業になるし、雇用の創出が復興エネルギーを加速させるだろう。

③起こりうる首都圏直下型地震や東海・東南海・南

海運動型地震の発生前に手を打つ——次に日本を襲う自然災害を考え、できる限り短い時間と手間で復興を完了する。万一、重なる事態となったら、財政的に福島の復興が宙に浮く可能性があるからだ。

④エネルギー資源小国を変える——これ以上、地球を汚さない。藻類での次世代燃料創出は、炭酸ガスでも放射能でも地球を汚さない高次元の施策になる。

夜間電力を藻類培養のためのエネルギーとして投入するが、エネルギーを変換し、蓄エネルギーの新しい方式として確立できる。原町火力、相馬共同火力、広野火力、常磐共同火力の排出炭酸ガスを利用して藻類を培養する。蓄電池や揚水式のダムに頼るだけではなく藻類で蓄エネルギーを進める。

⑤教育現場での措置——放射線防護教育、藻類産業育成教育を施す。校庭は表土を剥いで片隅に重ね覆土を施した上に深さ30センチの水槽を設置して藻類を培養し藻類産業育成と同時に放射線防護の教育を行う。